

## 平成の30年を振り返る

### くラクからブラックへく

いずみ学力研 金井 敬之

はじめに

年号が昭和から平成になったのは、ぼくが教師になって5年目の3学期だった。その学校で11年、次の学校で10年、そして最後の学校で11年勤務したので、ごくごく大雑把に言えば、ぼくの教師生活は、勤務校3校で30年。ほぼ平成の30年と一致する（大雑把すぎるが）。

そこで、平成の30年を前期、中期、後期と3つに分け、自分の教員生活と重ね合わせて平成の教育を振り返ろうと思う。

#### 平成前期10年（ゆとりと自由）

平成4（1992）年に、学校週5日制がスタートした。毎月第2土曜日が休みになる。この頃の学校はゆとりがあり牧歌的であった。午後4時半になると、半分ぐらいの教員が帰り、5時を過ぎると数人しか学校に残っていないという状況だった（地

域差や学校間の違いがあると思うが）。研修や出張は校内研修と生活指導、同和関係くらしいしなく、今のように毎日だれかが研修で出張しているということはなかった。

組合行事のソフトボール大会やバレーボール大会は、担当の先生が電話で、両校で出張や研修が入っていない日を選んで試合日を決めていた。そんなことができた時代だった。放課後、3時半過ぎから、車に分乗して会場校に出かけた。もちろん試合前には、放課後運動場で練習する時間もあつた。子どもたちが下校した放課後の時間は、かなり自由に使えたのである。

学級崩壊や親の無理難題要求のなかった。今思えば、学級に多動な子、こだわりの強い子など発達に課題のある子もいたが、ちよつとユニークな子という印象で、その子なりにクラスになじんでいたと思う（本

人はしんどかったかもしれないが未熟な自分にはわからなかった）。

2月の職員会議では、卒業式の君が代、日の丸問題で遅くまで議論をした。職員会議が子どもと教育について語り合う場であつた（今や職員会議は、各校務分掌からの提案や伝達の会になってしまった）。

親しい先生と数人で、「モチもちの木」の授業を交代でして、放課後に検討会をしたこともある。放課後子どもたちと一緒に練習をして縄跳び、けん玉、一輪車ができるようになったのもこの頃である。自由とゆとりがあつた。

#### 平成中期10年（学校づくりへのロマンと忍び寄る学級崩壊）

平成10（1998）年12月、教える内容を3割削減する新学習指導要領告示された。さらに、学校週5日制完全実施とも相まって、学力低下論が広がった。各職場で、児童の学力をどう高めればいいのかを考えるようになり、計算力、漢字力を学校ぐるみで高める取り組みが始まった。計算、漢字の実態調査、校内研修での取り組みの交流などが行われた。このことをきつかけ

に、管理職とも学校づくりのことで話をする機会が増えた。子どもたちにとって価値ある学校をつくりたいという思いを抱いた。

その一方で、教師の指示に従わず、授業に集中しない子どもたちが増え、指導困難な学級が増え始めた。今までと同じようにしていた指導が、子どもたちに響かなくなってきた。親の教師に対する信頼が低下してきたと感じることが増えた。

大阪では、平成15(2003)年、人事考課である「評価・育成システム」が試行実施され、翌年には本格実施された。教師の同僚制が崩され、分断される危機感をもった。平成18(2006)年には、全国学力テストが43年ぶりに実施された。

**平成後期10年(教育基本法改正、学力テスト、人事考課制度で息苦しい学校に)**

平成最後の10年は、多忙化、息苦しさの10年である。団塊の世代の退職にとまない若い先生が増加した。若い先生にとつては、人事考課も学力テストも当たり前の教師が増えたのである。市の研修も、「学力向上」という名の下に、学力テストの「点数」を上げる取り組みが、市全体で押しつ

けられた。何が何でも平均点以上をという意識が強い。校内研のテーマを学力テスト関連にしてほしいと言う指導主事もいた。学校の独自性が失われていった。

学力向上だけでなく、道徳研修、外国語研修、小中連携、保幼小連携、少人数指導研修など、若手には、初任者研、2年目研、5年目研、スキルアップ研修など、ほぼ、ひとりがひとつの研修を割り当てられ、毎日だれかがどこかに出張しているという状況になった。

物言わぬ若い教師が、校務の主要な分掌を担当し、上位下達の仕組みをさらに強めるようになった。管理職もそれを巧みに「利用」し、そんな若手の口から自分では言いにくいことを言わせるという校長もいた。

古きよき時代を知っているがために、今の多忙で息苦しい教育現場に耐えきれず、学級担任をはずれ担任外になったり、かうじて子どもファーストが残っている支援学級の担任になったりするベテラン教師が増えた。

「それはもう決まったことですか？それなら話し合いをしてもダメですね」校長は会

社でいえば社長だから、いやなことでもやらなあかんなあ「私たち教師は公務員なので国のやることに従うのは当たり前」という若手・中堅の声も聞くようになった。

子どもに学力をつけるより教科書を手際よくすすめる、いじめや親の苦情がないように1年間を「無事」に過ごしたい教師が増えた。

**おわりに**

振り返ってみると、この30年で、学校現場は大きく変化した。教師や学校への見方も変わった。「夏休みは休めるからいいですね。授業のない長期休業は何をしているのですか」と言われた時代から「先生って大変ですね。ブラック企業ですよね」と言われるようになった。ラクからブラックへと大きな変わりようである(韻を踏んでいう場合ではないが)。

ただ、このまま学校現場がしんどく悪くなっていくとは思えない。社会全体との関わりに規定されるとは思いますが、今の矛盾はいつか現場を動かす力になって、さらに高度の段階に至ると思う。それが歴史の発展の法則であるからである。